

吉井源太と明治

《13》

漉桁を大きく改良

「土佐紙業の恩人」没後100年 村上 弥生

吉井源太が最初の大きな仕事をしたのは、明治維新の八年ほど前の万延元（一八六〇）年だった。

漉桁と漉簀を改良した。これによって小判紙八枚、または大判紙六枚が一度に漉けるようになった。これ以上簀桁が大きくなると、漉くのが困難になるといふ大きさを。

ここで言われる小判紙というのは、土佐の言い方で、普通には半紙といわれるもの。大判紙は美濃紙といわれるものである。江戸時代末以前にはどちらも一枚ずつしか漉けなかった。

そして、源太によるこの改良の三十年ほど前に小判紙四枚、または大判紙二枚が漉ける簀桁になっていた。それを源太は小判紙で

八枚、大判紙で六枚が漉けるようにしたのだった。

源太は履歴書の中で、「この桁は、幸いにして同業者間に用いられ、今では全国、改良した紙を漉くところではほとんどがこれを用いるようになってい」と喜んでいいる。

手漉き作業の弱点はやはり、量産ができないことだ。一回の作業で二枚くらいしか漉くことができないれば、大きな注文には応えられない。明治になると新しい紙が開発されて国内や海外から大量の需要が出るようになった。その前に、このような器具が作られたということの意味は大きい。

源太はまた、紙の質に直接関わる漉簀についても改良を行った。それまでは、

カヤを使い、それを麻の糸で編んでいた。一寸、つまり約三寸の間にカヤが二十本から二十五本並んでいる。薄い部分ができがちだ。源



容堂公が賛を入れた源太の富嶽絵 (いの町紙の博物館蔵)

太はこの漉簀の改良を考えた。細い竹ヒゴを使うことにし、編む糸を絹糸に代えた。このようにすると、一寸の間に竹ヒゴが五十本くらいまで入り、紙は滑らかで緻密なものになる。

源太が簀桁を大きくした万延元年は、桜田門外の変が起こって井伊直弼が暗殺された激動の年だ。この二年前には井伊直弼が政敵を排除した、いわゆる安政の大獄があった。

憤慨した容堂公が隠居願を出し、幕府より謹慎の命が下る。そして二年後のこの年、七月に源太は、東京品川にあった土佐藩下屋敷にいた。そこで富嶽（富士山）の絵を描き、容堂公が賛を入れた。賛とは、画に添え書かれた詩や歌などのことだ。

機会があれば、いの町紙の博物館に展示してある見本で大きさを見ていただきたい。容堂公は謹慎中のために、下屋敷でこのような時間を過ごしたのだろう。源太の身近に幕末の政変があった。しかし、源太はこのような中でも冷静に、役に立つ紙の改良方法を考えていたのだ。

この時期に源太は日記を残していない。しかし、その後日記をつけるようになってからも政治の話は全く書かれることがない。あくまでも紙漉きを仕事とする人間として働き、世の中の動きを見通しつつ、必要な職責を全うしようとしたのだと思う。

（京大大学院研修員、京都府在住）